

富山県岩瀬中学校の皆さんへ

はじめまして。デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの児童書の翻訳をしている梶谷玲子（ひだに れいこ）です。この度、司書の木村先生からご連絡いただき、大変嬉しく思っております。

私は富山県で生まれました。育ったのは東京と埼玉で、北欧育ちというわけではありません。「なのにどうして北欧語の翻訳をしているの？」とよく聞かれます。

きっかけは中学生の時、英語の先生の推薦でスピーチコンテストに出たことでした。その時、外国語を話す面白さに目覚めました。英語を読むのも好きでした。違う言葉で話す人達は考え方が日本人と同じところもあれば違うところもあり、また日本語とは異なる外国語特有の言い回しを知るのも、すごく楽しかったのです。ずっとこんな風に外国語に触れながら暮らせたらと思いました。

でも高校生の時に、自分は英語という言葉は好きだけれど、英語圏の文化に特別興味があるわけではないと気づきました。

そこで図書館に行って、世界にどんな国があって、どんな言葉が使われているのか調べてみようと思いました。図書館には、世界の人々の暮らしや文化、社会について写真や地図、文章で示された本があり、そこでヨーロッパの北部にデンマークやスウェーデン、ノルウェーという小さな国があることを知りました。

それから児童書の棚にこれらの地域が舞台になっている本がないか探してみることにしました。そうして見つけたのが『マリアからの手紙』（徳間書店）というデンマークの児童書でした。デンマークの田舎町に暮らす心臓病の少女マリアが、首都コペンハーゲンという都会から引っ越してきたマークスという男の子と出会い、恋

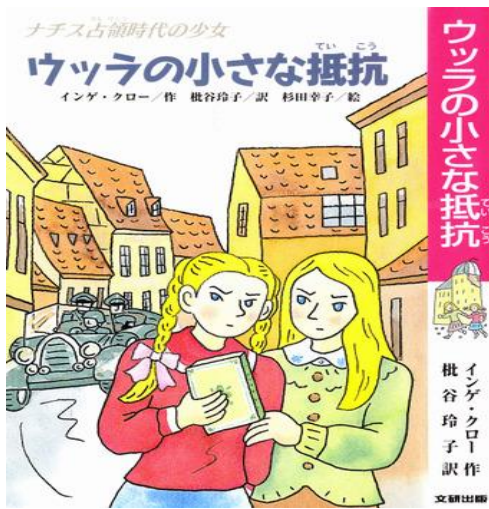


をし、自分の人生で大事なものが何かを考えるとという内容です。この本の中で特に印象的だったのは、マリアの担任の先生でした。先生は子ども達の意見に真剣に耳を傾けます。また自分の意見を大人相手に言うのと変わらないぐらい子ども達に正直にまっすぐに伝えます。先生の話すことは教科書にのっていることばかりではありません。社会で起きている問題について、立場は関係なく一人の人間として子ども達に意見を述べ、疑問を投げかけ、どうしたら社会をよくしていけるのか、真剣に話し合います。

こうして私は北欧の文化についてももっともっと知りたいと思うようになりました。そこで高校の図書館司書の先生に相談をして、その本を訳した翻訳家の伊佐山真実さんという方に手紙を書いて、出版社の編集部に送ることにしました。ドキドキしながら待っていると、数週間後、伊佐山さんから丁寧なお手紙をいただきました。伊佐山さんが東海大学という神奈川の大学で北欧文学を学び、在学中にデンマークのコペンハーゲン大学に留学したこと、デンマークに留学するためにどんな方法をとれるや、日本でデンマーク語を学べる大学について教えてくださいました。

高校卒業後、伊佐山さんに教えていただいた東海大学か大阪外国語大学のどちらかに進もうと思ったのですが、両親の反対にあい、やむを得ず東京の別の大学に進学しました。でも結局2年生の時に北欧のことを学びたいという気持ちを抑えきれず、受験し直し、大阪外国語大学の地域文化学科デンマーク語専攻に入りなおしました。両親は私が遠い大阪に行くことに反対でした。それに東京の大学で払ってもらった2年間の学費が無駄になってしまうのです。学費は出すけれど、生活費は自分でアルバイトをするようにと言われました。学費を出してくれた両親には今でもとても感謝していますが、4年間、寮の費用や食費、生活費をアルバイトで賄うのはとても大変なことでした。4年生の時には1年休学してデンマークに留学しましたが、留学費用も自分で用意しなくてはなりませんでした。贅沢な話かもしれませんが、それまで両親に守られ、ほとんどアルバイトもしたことがなかった当時の私にとっては、大阪の聞きなれない言葉で話す大人に囲まれて毎日アルバイトするのは楽しくも大変な経験でした。





ISBN4-580-81506-8
C8397 ¥1300E
定価 本体1300円(税別)

文研じゅべい
小学5年!
文研



の先生に薦めていただいた『ウツラの小さな抵抗』という作品を、留学から帰ってすぐの4年生の時に、木村由利子先生のご紹介で、文研出版から翻訳、発表することができました。

その後は北欧家具の輸入販売の会社や翻訳会社で働きながら、翻訳の勉強を続け、今は専業で翻訳の仕事をしています。

皆さんは今中学生なのですよ。私は中学校の時のことを振り返ると、必ず中学校の英語の先生の言葉を思い出します。先生はこんなことをおっしゃっていました。

「勉強って面白いぞ。俺ぐらいの年になると、余計に勉強の面白さがわかる。大人になってやっぱり勉強なんて面白くないって思ったら、俺のところ来い。ステーキをおごってやるから」

私は今でも時々、その先生に会いに行けたらいいのに、と思います。ステーキをおごってもらうためではありません。

今、私は翻訳をしている本に描かれたさまざまなテーマ（児童労働、第二次世界大戦、障がい者福祉など）について調べ、考え、勉強するのが、楽しくて仕方ありません。世界には自分が知らないことが、まだまだこんなにたくさんあるんだ、と毎日が発見の連続です。

なので私はその先生に会えたら、こう言うことでしょう。

「先生のおっしゃる通りでした。今も勉強が続けられて、とても幸せです」

2014年11月12日

枇谷 玲子